

第13回

第2章 人間としての自覚

イスラーム
～弱き人間の支え～

今回学ぶこと

今日の世界情勢から誤解を受けやすいイスラームであるが、ユダヤ教・キリスト教と同じ唯一神を信仰し、旧約聖書以来の預言者と掟を守る教えである。預言者ムハンマドに始まるその成立過程を知り、教典クルアーンと六信五行からイスラームの教えとムスリムの生き方を理解する。



講師
和田倫明

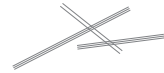
今回のキーワード！

アッラー／クルアーン／ムハンマド／メッカ／六信五行

ムハンマドとイスラームの成立

イスラームは7世紀アラビア半島の商都メッカで、預言者ムハンマドによって創始された。ムハンマドは商人であったが、瞑想しているときに神アッラーの声を聞くようになった。彼を通じて語られた神の言葉は、教典『クルアーン』に記されている。

一神教を奉じ弱者救済を説くイスラーム（神への帰依）は、ユダヤ教やキリスト教と同じ唯一神を信仰し、旧約聖書以来伝えられてきた、神に与えられた掟に従う。この教えは、旧来の支配階級と対立し、弾圧されていったん近隣のメディナへ逃れるが（聖遷、ヒジュラ）、そこでイスラームの共同体（ウンマ）を整えてメッカを奪還、以後アラビア半島統一から地中海世界に広がる勢力となり、ヨーロッパのキリスト教勢力としばしば対立した。



「六信五行」にみるイスラームの教え

イスラームでは一神教への帰依、偶像崇拜の禁止など、旧約聖書以来の多くの掟を共有している。ムハンマドは最大最後の預言者とされ、旧約聖書のモーセや、キリスト教のイエスも預言者の一人という位置づけである。

イスラームを信仰する者（ムスリム）は、六信五行を信奉・実践する。

六信とは、神（唯一神アッラー）、天使、教典（クルアーン）、預言者（ムハンマド）、来世、天命を信じることである。

五行とは信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼である。礼拝は聖地メッカの方角に向かって一日5回行われ、断食月には日中の飲食を断ち、貧しい者のために喜捨を行い、メッカのカアバ神殿などに巡礼を行う。

イスラームの拡大と発展

イスラームは、ムハンマドが亡くなってからも発展し、今日ではキリスト教に次いで信徒人口の多い世界宗教となっている。中東戦争や今日まで続くパレスチナ紛争、イスラーム過激派によるテロなどのイメージから、イスラームは暴力的な宗教であるかのような誤解を受けがちであるが、本来平和を願い、弱い人間を支えるものであり、圧倒的多数のムスリムは普通の人々である。日本に生活するムスリムも多くなった。相互理解が重要である。

Wadaコラム

「善」は「悪」である?!

善いものと悪いものたえというの、宗教ではよく出てくる。キリスト教のパウロは、「わたしは自分が欲する善はしないで、欲しない悪を行っている」と言う。自分は肉の世界に属するものであり、自分にとって善いこと、自分が欲することというのは、霊の世界では悪いことであるから、しないようにするのだ、という意味である。イスラームでは、クルアーンの「食卓」の章に「悪いものと良いものとは、同じものではありえない。いくらお前のほうで、悪の多いほうが好きだとしても」という言葉がある。どうも私たちは、「悪いもの」を欲してしまうようだ。